



Title	イスパニア経済諸科学：語学と専門諸科学との概念的抵触に関する若干の基本問題
Author(s)	山崎, 俊夫
Citation	大阪外国語大学学報. 1968, 19, p. 137-143
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80319
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

イ ス パ ニ ア 経 済 諸 科 学

——語学と専門諸科学との概念的
抵触に関する若干の基本問題——

山 崎 俊 夫

Concepciones fundamentales de las Ciencias Económicas Españolas

——Choque de los Entendimientos lingüísticos
contra los de económicas

Toshio YAMASAKI

El año pasado, cuando estaba yo en Madrid, destinando a mi Universidad de Osaka, Sección Española, envié un pequeño repórter que fue compilado en nuestra revista anual ‘Más y Menos’, como “Unas Notas : Los caracteres del idioma español dentro de las Ciencias económicas y sociales Estudios de las palabras españolas particulares.”

Esta vez, correspondiendo a aquél, me refiero a continuación, a unas especialidades del alto nivel de las ciencias españolas de estos campos.

El difícil entender las concepciones tradicionales y también modernas a través de la garganta bastante estrecha del idioma extranjero muy remoto, será una de las importantes causas de haberse poco bañado aquella cultura verdadera muy superior, alrededor de nuestras orillas.

Para adelantar el futuro desarrollo de nuestro país, faltará más choques culturales de calidad distinta, especialmente en el campo de los juicios.

1. 序にかえて

イスパニア経済学が特殊対象地域を基盤に培われた特殊経済学であることは云うまでもない。しかし、その対象領域が特殊地域のみに限定せられていると考えることは誤りである。特殊地域

に育ちながらも、なお同時に、普遍的な一般経済学に対する見方をも特殊経済学としてのその長い伝統と歴史の上に結実させているからである。Martínez 教授は Curso Doctorado de Económicas の講義の最初に、各国にはそれぞれ独自の経済学が存在することを強調せられた。(1965～66年度マドリッド大学政経商学部) イスパニア経済学が、経済学でありながら、なお特殊の性格をもつものであること、したがって、これを研究の対象として、当然、国際的に比較経済学が成立しうることを先ず念頭に置きたいと思う。

上述の自明の論理から、商学・経営学の分野でも同様の結論が出て来る。少なくとも、イスパニア経営学はきわめて特徴的なものとして存在していることを伝統あるイスパニア企業経済学 (Ciencia económica de empresa) の名誉のためにも是非強調しておかねばならない。マドリッド大学政経商学部にも Pirla 教授の同名の講座があるが、筆者はこれをイスパニア企業経済学と呼ぶことにしている。経済学と経営学とは、社会的総資本を研究対象とするか、個別企業を対象とするかによって筆者はこれら両者を区別して考えている。前者はいわゆる政治経済学であり、後者は企業についての学である。それにしても、イスパニア経済学では、これら両者が、いずれも国家の科学として発展して来た点で特徴的であると云えるであろう。つまり、このことが総体的にイスパニア経済諸科学における普遍的特徴であると思うのである。

このような特殊経済学に対する基本的理解がなくては、例えば国際金融論の学者が、中南米の複雑な現象を前にして嘆息せざるをえなかった事実も到底納得できないに違いない。あるいは、中南米の会計帳簿組織を見て、全くの乱脈振りであると主張する会計学者が、実はその根底に伝統的に一貫した論理の体系を古くから包蔵している事実を見のがす結果にもなるであろう。先般の日本経営学会でドイツ経営学について研究報告があった際、アメリカ経営学とのあまりの類似点が話題になったが、このような動向は、もちろん最近のイスパニア経済諸科学の内部においても皆無ではない。直接の体験ではないので明確には云えないが、バルセロナ大学では、土地から職業的訓練を目的とした米国のいわゆるマネージメントものが極めて積極的に取上げられていたように思う。ビルバオの商科大学では、一方でこのような最近の動向にも注目して進歩的でありながら、なおかえってヨーロッパ的特徴を尊重する点で一段とマドリッド大学に近接しているように筆者は見ている。そして、マドリッド大学が、官学的立場で西欧諸国の各大学や研究機関と直接に密接な連繫を保ちながら、同時に中南米のそれともたえず交流の実をあげている模様は幾つかの国際的学術会議で体験した。それにしても、多くの場合イスパニア経済学の立場から、独自の判断なり評価なりをしている点は強調されなければならない。つまり、イスパニア人が自から採択する方法により、イスパニア人の頭脳を通して概念的に結果したとたんに国際的な普遍理論にもわかに特殊化されてゆくのである。最近の旺盛な modelo の研究によって、経済学史の全体系も、たちまち数式とグラフに変化して来ていることなど、その著しい現われであろう。米国や国連からの統計の受容れでも、実はレオンチーフあたりから出発して、流行の input と output で表示せられたバランスシート化して来ることも面白い傾向である。しかし、このようなエコノメトリックス的動向のなかにあっても、Inza 博士の交通経済学における平均はきわめてギリシ

哲学的な真理としての実在の平均であり、また Decano である Cantañeda 博士の Investigación Operativa は、Vector によりみごとな、米国式 O.R. への批判を展開せられる。そして、前述 Pirla 博士の nudo と vector によるデシジョンメイキングも、英国仕込みとうかがったが、きわめて客観的な規範論理を独自のものにしておられる。こうして研究の水準はまさに国際的なそれを維持し、あるいはこれを更に上廻ることもしばしばである。冒頭に掲げた Martínez 博士の国際金融論も、Keyenes を尊重しつつ、Patrón de oro の論理を守りぬこうとするヨーロッパの考え方を強調される。世界銀行の統計調査局長を兼ねたイタリア銀行副総裁を招聘しての国際討議でも、副総裁が公表せられた見解は、同教授の平素の御講義と大差なく、ことさらに目新しい性質のものではなかったし、むしろ、講義の体系においてはるかに、より精緻な高水準を維持しておられたことは言うまでもない。

Ecuación による equilibrio を求めることが支配的であるとは云え、もちろん、全体として数理派的傾向には絶えず社会科学的根拠が反省されてゆく。そして、イスパニア経済学独自のフィロソフィーは厳然として保存せられているのである。博士過程の講義や演習の大半は desarrollo económico nacional に関連せしめられるものであったことも、一つの大きな動向のしるべであろう。日本の「クリハラ」理論なるものが、フランス語による著作を通じて高く評価せられておったことも、実はこのような傾向のなかにその理由の根底を求めることができるにちがいない。

この際特に強調しておきたいのは、イスパニア経済学にしるイスパニア企業経済学にしる、いづれも、現在の経済諸科学で反省を要する基本的諸問題が、国際的な学問水準にいささかの遅れをとることもなく、いっせいに顔をそろえて現われて来ている点で、国際比較として極めて注目しに値するものがあるということである。しかも、このようなイスパニア経済諸科学は、語学の立場を通してでなければ、他の諸国における特殊経済学の常識では、到底理解しえないものにちがいない。他国語には全然あらわれないようなイスパニア語に独特と思われる経済用語も少なくない。また他国語における場合と綴字が全く同一であるにもかかわらず、概念内容が全然食い違っている例がイスパニア語にはあまりにも多い。sinónimo の辞典がほとんど役立たぬどころかかえってじゃまになるから、まことに厄介なことである。筆者が特に語学研究の立場の必要性を強調するゆえんである。最後に重複を敢てすることになるが、筆者の専攻する企業経済学について更に付言しておきたい。Decano の Vector は分析してえられた要素を最終的には二個ずつ組合わせて諸要素相互間の総合的結合を見つけるわけであるから、従来筆者が矛盾論で考えていたところと窮極的には一致してくる。また、Pirla 教授の nudo と veetor はこれも要素の一つ一つが互いに結合されることにより、部分相互間、また全体の総合がすべていづれも相互批判原理となるところから、嘗て筆者が流れ作業組織の主観的統一を管理論で考えた点と符合してくる。なお、Inza 博士の場合、そのギリシャ的フィロソフィーは、どのように分析を徹底してみても日本人の原子的分析思考方法にはならず、云うならば、要素自体が分子的まとまりをもつ不思議なイスパニア人の国民性がみごとに結晶しており、それ自体一個の普遍的真理となって凝り固まっている。そこに真理としての実在の美しさがある。いつまでも見あきのしない黄金率の平均である。

特殊経済学が国際比較によって相互に一致した見解に到達するとき、把握せられた概念内容はもはやその特殊性を喪失して普遍的な一般の経済学のそれになって来るであろう。しかしながら、そのようなかよわき平均を問題にしようというのではない。比較が成立するのは、それ自体に普遍的尺度をもつ一般の経済学が存在しているからではあろうが、筆者が問題として当面しているものは云うまでもなく特殊性のゆえに認識せられるイスパニア経済学の特殊概念自体である。それにしても、その特殊性は概念内容に結晶する方法の差から生まれてくる。この概念内容と分析方法がイスパニア経済学の場合あまりにも特殊性をもつ。だからこそ、ロゴスの体系としての文化概念を語学の立場を通して分析するのではなければ、この特殊性には到底接近できる筈がない。方法とそれによって結晶した概念内容、これを以下、若干の基本的諸問題を提起することによって、語学からと経済学からと双方に視点を置き、それら両者間における見解の食い違いを調整して相互の接近と結合をはかろうと試みた体験を披露しようとするのがこの小論のねらいである。

2. 概念内容把握のズレと調整

Rule of Sam は経営学ではあまりにも有名な目録算のことである。この場合内容の把握さえ適確であれば問題はないであろうが、親指の「法則」と訳すよりは、筆者の考えではむしろ rule はものさしの意味ではないかと思う。とかく日本人は rule と云えばすぐ「法則」ときめてかかるくせがある。Law Merchant を「法律商人」と訳したことで、監修責任者がとんだ恥をかいた例もある。これらは、語学の側と経営学や法律の専門知識の双方から、より積極的な調整がおこなわれていたならば起りえなかったナンセンスにちがいない。

大家のすぐれた労作におけるきわめて末端の事項を引合いに出して甚だ恐縮であるが、高橋正武教授の西和辞典にも小辞典にも Pasivo の訳語に「商」の項で「借方」となっている点が疑問になる。簿記であるならば Activo（借方）に対して Pasivo は当然「貸方」とすべきだと思われるからである。借方・貸方の表示は元来、人名勘定の名残りであろうが、負債という一般概念が語学的に支持せられるにしても、簿記上の概念では貸方勘定としてこの語を把握することになっている。左と右の取り違いが、後から出版せられた小辞典にも誤植のままに移されたとすれば、これによって校正の上で二重のミスがおかされたことになりかねない。

ついでながら、mano de obra (p.584) の訳語は手仕事、手間賃、労銀となっており、また小辞典には人手、労働力、労銀 (p.279) とされている。この語は伝統的に人口問題が重視せられるイスパニア世界では、労働人口の意味にしばしば使われる。もちろん、同教授の辞典におけるこれらの訳語はいずれもそれぞれ当をえたものであって、誤りなどというようなものでは毛頭ない。ただ、経済学の概念としては、労銀と労働力の二つの訳語が最も妥当なものとして受容られることであろう。ところで、この mano という語は muerto と結びついてイスパニア経済学の経済循環に関する概念としてきわめて特徴的であることが指摘せられる。mano muerta,

amortización などがその関連を示めす適例である。前者は、往昔、教会領に寄進せられた不動産を云い、減価償却も、実は muerto にするところから、いずれも特定の生産過程が経済循環の外に置かれることを意味するものと考えられる。そして、mano de obra は、まさに、このような経済循環の中に投入せられた生産労働であろう。

さて、経済学の対象となる循環の規模が甚だ問題であるが、capital は元本であって、通常 invertido, inversión が循環過程の中に投入せられた投資の意味に使われる。その意味で社会的総資本を筆者は従来 total invertido social と表現し、要すれば un conjunto と説明を加えている。それにしても、地下資源まで計測によって信用概念並びに資本の計算に入り込むことがあるから、必ずしも資本以前というわけにはゆかないことがある。今後、計算技術が発達するにつれてますますこの傾向はいっそうの激しさを加えることになりかねない。また、以前、設備投資によって投入がおこなわれた機械が、現在、現場に存在していなくても、個別資本の循環活動に営てのその機能の影響が何らかの形で未だに生きていとするならば、当然に簿記上の記帳があって然るべきだという考え方も可能になる。未実現の単なる取引契約が、フランスの会計制度で期間計算の中に把握せられている例も、イスパニアの会計制度にそのままあてはまる。なお、Contratos de seguro—Seguros contratados の対立関係が、米国流に単なる欄外の説明事項ではなく、balance general の中に現われることも、これをことさらイスパニア的に企業実体の時空における価値の流れとして経済循環の中にとらえるからにはほかならないと考えるならば、このような解釈も一つの理論的説明として或いは根拠に妥当しうのではないだろうか。

Fuertes 教授は、世界銀行の調査団報告への批判を次のように述べておられる。

El buen sentido……de este grupo de economistas, les lleva……a un resultado triple : a) Un texto desigual ; b) Un continuo descubrimiento de Mediterráneos ; c) A veces, la confusión con el Mediterráneo de lo que no es más que un espejismo. (Vid.—“El Desarrollo Económico de España” : Juicio Crítico del Informe del Banco Mundial, Revista de Occidente, Madrid, 1963. p. 18)そして、この方面の調査研究には Torres 教授をはじめ、数多くの業績が既に存在していることを指摘せられる。イスパニア人の側から、外国人による自国への意見を反駁したわけである。すでにイスパニア経済学ですぐれた分析があるにもかかわらず外国人の立場から、同じ研究対象に異見がさしはさまれたことに対する反撥があろう。方法が異って食い違った分析結果が生じたとき、その両者はそれぞれの立場から独自の意義をもつことはありうるにしても、決して単なる感情の行き違いという問題だけではなく、イスパニア経済学の科学的立場から黙視できない充分な理由があったからこそその批判である。特殊経済学が精緻な体系をもち、研究の高度の水準を維持して、その成果に立派なものがあるならば、一般は特殊の立場を極度に尊重することが妥当な場合も多い筈であろう。

学部でイスパニア経済構造の講義を担当されているこの Fuertes 教授には、Primo de Rivera についてのすぐれた研究がある。イスパニア企業経済史の上で有名な思想家をあげるとすれば、近代的事業計画の先駆者として忘れられない人である。Taylor と Fayol が奇しくも同時代に現

われたように、T. V. A の Lilienthal 博士とプリモ・デ・リベラもまた相前後して、しかも両者いずれも水利事業を総合開発計画化した点で共通している。のみならず、後者はイスパニア労働の近代的組織化に著しい功績を残している。

それにしても、イスパニア企業経済学がすぐれて企業財務論的傾向をもつことにはイスパニアの企業経営における特殊の事情の存在が理由になっているように思う。およそ、イスパニアの企業では、組合が労務管理を完全に掌握していると云っても過言ではないであろう。つまり、作業面はすべて組合の手にかまけられており、組合が現場管理のいっさいを担当しているわけであるから、経営者側は経営における資本効率原理は失わないまでも単に財務の面を支配するに過ぎないことになってくる。嘗て親方が職人の管理権をもっていた当時の労務管理面が、近代経営で経営者側に取上げられるに到ったと考えるとき、イスパニア企業経済学における現在の作業管理に対する財務面のみに限定せられた消極性は、果して近世への経営管理の逆戻り、非近代性と断言できるかどうか。そして、この点の解明にこそイスパニア企業経済学の現代的意義への吟味と検討がなおさら必要になってくる。

イスパニアにおける労働組合の伝統と歴史には、古く、サン・シモンの影響が大きく、なお現在に及んでいることも特筆しなければならないことである。組合の経営参加にしても、宗教の社会事業との密接な結びつきが重大な基盤となりパイプになっている。そして組合の全国大会には経済閣僚が出席することにより、産業全般にわたる政策の決定に殆んど国会並みの勢力をもつ。組合規約は慣行のなかでも最高度の尊重を受ける。組合主義の経済・社会発展計画であり、組合の協力なしに経済・社会の発展は存在しない道理であろう。以上の事情のほかにも、マドリッド大学での企業経済学をみるならば、会計学者であり、大蔵省の会計監査官を兼ねる Pirla 教授が大きな地歩と役割を占めてほとんど独り舞台の活躍をしておられるところに、この科学の財務的な性格を窺い知ることができるように思う。Presidente が単なる会議の Chair man に過ぎず、実際の事務管理では director が経営管理の責任者であることもこの国の企業における著しい特色である。

カトリックの国として、一年の暦にはすべて聖者の名前がつき、大体现行日本のものと数において大差はないが、国の祝祭日はこうした聖者をまつる日にあたっている。宗教と国民生活、更には経済生活との間にはきわめて密接な関連が保たれている。聖職者の市民生活における生活指導的地位と役割は絶対である。このような国だからこそ、profesión は文字通り主として弁論を任務とする自由業で、また職業は vocación として労働力の構造や組織の上で変化が乏しく全般に静態的であることは当然の成り行きであろう。それにしても、既に何度も述べた通り、イスパニア企業経済学は、古い伝統の上に国家の政策学としてきわめて特徴的な発展を遂げて来た。このようなイスパニア企業経済学が、他面において現代化の悩みに逢着していることもまた事実である。過去において遂げられた発展が高度な水準を維持して飛躍的に大きければ大きいほど、云わば反動的に現代の苦悩も大きいことは一面の真理であろう。口を開けば demasiado と云う国民ではあるけれども、その実、基本的な問題についてはたいていのことなら既に何世紀にもわた

って大きな試練を重ねていて、微動だにしない豊富な経験をもっている。いかに著しい現代的変化に見舞われたとしても、こうした古くからの殆んど完璧に行き届いた網の目のような龐大な体系が一挙に崩壊し去るほどもろいものであるなどとは到底考えられることではない。そして、このこと自体、普遍的な現代的意義をもって見直されてよいだけの充分な価値を包蔵しているように筆者には思われる。

3. む す び

この稿は語学と専門諸科学の概念的抵触または背離を取上げたわけであった。イスパニア経済学でたえず特徴的に問題とされることのなかに、経済価格が貫徹しない理由として、社会価格乃至政治価格の介入を考える方法がよくおこなわれている。事情は違うが、あたかも差益地代に対する絶対地代の理論的補正を思わせるものがある。いわゆる管理価格に似たところはあっても、背後に文化の均質性と異質性を経済発展の論理に導入する問題をはらんだ奥深さをもつ。最近、国際会議などを通じて、或いは他国の大学と大学相互間で直接に、文化交流を促進しようとする動きが一層激しく見受けられる。イスパニア国内でも、語学の面で概念的な相互理解をどのように促進してゆくかがことさらに問題化している。この方面の解決に専門機関を置こうとするなどその具体的対策の一例である。普遍的先入主をもっていて、甚だしい誤解をしてみたり、相手国の特殊性が容易に理解されえなかったりすることのありがちなテーマのこの問題の解決には今後とも時間と努力をかけねばなるまい。